

Title	遺稿にみるガイガー美学の基本構想 : Die Bedeutung der Kunst-Zugänge zu einer materialen Wertästhetik-より
Sub Title	
Author	原, 秀行(Hara, Hideyuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.67 (1978. 3) ,p.174- 175
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会発表要旨
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000067-0174">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000067-0174</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 遺稿にみるガイガー美学の基本構想

—Die Bedeutung der Kunst

—Zugänge zu einer materialen Wertästhetik—より—

原 秀 行

Moritz Geiger (1880—1937) は我が国でもつとも知られた卓越した現象学的美学者である。彼の没後従来公刊されなかった美学上の遺稿の一部分が、『芸術の意義——実質的価値美学への道程——』の表題のもとに1976年公刊された。その『第二部』から、ガイガー美学の基本構想を概観することができる。

冒頭で美学は『価値学』(Wertwissenschaft)、特に「美的価値の学」(Wissenschaft vom ästhetischen Wert) と規定される。従って美的価値こそ研究の中心である。——これが彼の美学構想全体を貫く根本理念である。

さて我々は直接的体験に於て美的対象の価値を把捉するが、美的なものの領域には「適意」(Gefallen) と「享受」(Genießen) という二種の直接的体験形式がある。両者の相違は次の三点に存する。即ち第一に適意とは美的対象に対する我々の「態度決定」(Stellungnahme) の一種、つまり肯定的態度決定であり、否定的態度決定としての「不適意」(Mißfallen) と直接対立する。一方享受は美的対象に対する情緒的反応 (emotionelle Reaktion) であり、心理学的な「事実」(Tatsache) である。それ故享受と直接対立するもの、negativ なものはない。第二に主観は客観に対して、適意に於ては能動的だが享受に於ては受動的である。そして最重要なのは第三の相違点である。即ち適意に於ては美的対象の価値が把捉され肯定され、不適意に於ては反価値が把捉され拒絶される。これに反して享受は価値に対して盲目であり、美的対象の価値を把捉することがない。

かかる相違性が一般に美学理論に深い亀裂をもたらす。即ち美学が適意から出発すれば、研究の中心は、対象に内在する品質としての、独立的な直接的価値としての美的価値が占める。かくて適意美学 (Gefallensästhetik) は価値美学 (Wertästhetik) となる。他方美学が享受から出発すれば、研究の中心には、対象の我々に対する有効性 (Wirksamkeit) としての、享受産出手段の間接的価値としての美的価値が来る。かくて享受美学 (Genußästhetik) は効果美学 (Wirkungsästhetik) となる。また享受が「事実」である故に、享受美学は事実美学 (Tatsachenästhetik) である。所が本来美的価値は対象に見い出される直接的価値であるから、美的対象

の価値をその効果に於てしか見ない享受美学は、適意美学に比して、誤り (falsch) ではないにしても不完全 (unvollkommen) と言わねばならない。

しかしかかる客観性の他に、美的価値は主観性の側面も持つ。価値は全て主観的意義 (Subjektsbedeutung) を有するが故に価値なのであるが、美的価値は主観との直接的関係の中にのみ、観照主観に対してのみ、観照主観のためにのみ存する。

そして美的なものは美的価値の「把捉」にではなく、「美的享受」にこそ極まると言うべきである。あらゆる享受は快であるから、「美的享受」の解明は心的生の連関における「快」の意義の理解による他はない。その際、対象が接触する「自我」(das Ich) の部位に着眼せねばならない。何故なら自我は点の如き存在ではなく、重層構造 (Struktur von Schichten) を持つからである。このうち三つの層が重要である。第一の層は「生命的自我」(vitales Ich) であり、ここで美的対象の表面効果が単なる感覚的快を惹起する。第二の層は「経験的自我」(empirisches Ich) 或は「自己」(Selbst) で、この層での享受は本来的美的体験からは除外されねばならない。そして美的体験が源を発する部位は第三の層、即ち「現実存在的自我」(existenzielles Ich) であり、偉大な芸術作品の深部効果が我々を「震撼」(erschüttern) させ、我々に「幸福」(Glück) を招来するのはこの層である。美的なもの極みとしての「美的享受」とは、実はこの我々を「幸福にすること」(Beglückung) なのである。またかかる「美的享受」が Genuß というよりも Beglückung と解釈されるのは、幸福が快以上のものと考えられるからである。この Beglückung が現実存在的自我と美的価値の相互把捉に於てのみ成就される故に、適意美学は、生命的快の域に滞る享受美学に当然優先する。

この Beglückung が達成されるのは無論「美的態度」(ästhetische Haltung) に於てである。美的態度は、現実存在的自我が美的価値に向って開かれる必要上、「内方集中」ではなく「外方集中」でなければならない。そして特に美的な外方集中とは「美的直観」(ästhetische Intuition), 即ち対象の「直観性」(Anschaulichkeit) の把捉である。しかし美的態度は現実存在的自我と美的価値の直接的接触の前提条件に過ぎず、また上述の規定は美的態度の形式的 (formal) な側面に関するのみであり、実質的 (material) 価値美学によって他日補完されねばならない。

——以上概観された Geiger 美学の基本構想を図式で示せば次の如くなる、

美学 { 適意 (=態度決定) [美学] — 現実存在的自我 — 幸福 — 価値 [美学]  
 { 享受 (=事実) [美学] — 生命的自我 — 快 — 効果 [美学] … 不完全

我々は彼のこの図式の正当性、妥当性を問題視すべきであろう。位置付けが適意は不当に高く、享受は不当に低くないか。適意を幸福を招来する美的価値の把捉機関として据え置き得るか、この構想は適意の過当で楽観的な解釈と言えなくもない。